

発刊にあたって



校長 高木 由美子

早春の候、皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

本校では、研究主題として「「わたし」が変わる「ものがたり」の学び—語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案—」というテーマについて、全教員一丸となって取り組んでいます。「ものがたり」の持つ力を活かした授業によって、生涯学び続けようとする強い学習意欲や、その基盤となる確かな力を持った生徒の育成をめざし実践を続けてきました。

私たちが着目したのは、感性にひびく授業を展開するための「自己に引きつけることへの有効性」や、「題材のドミナントの変容をいかに明確化するか」についてです。教材開発、単元構成、研究授業の振り返りから、カリキュラム全体を通じて「自己に引きつけた語り」を生み出す実践を行っていくことで、生徒の学ぶ意味や、価値の実感につなげ、生涯にわたって学び続ける学習者を育てることに尽力してまいります。

また、平成30年度から、文部科学省研究開発学校の指定を受け、生徒自らが主体的に課題を設定し、自らの力のみで解決していく異学年合同の「共創型探究学習」を創設した場合の教育課程や系統的な支援の研究開発を行ってまいりました。すなわち、総合学習 CAN について、伝統を生かしつつ、新しい部分を取り入れて、2年間の実績を踏まえ、さらに進化した「総合学習 CAN」を提案いたします。

本号では、本年6月に開催予定の研究大会に向けて、研究テーマの概要や目指す学習論、実際の授業で実践と評価を可能とするための取り組み、支える環境・学校文化などに言及しながら、各教科・領域ごとの内容を掲載いたしました。ご一読のうえ、ご意見やご示唆を頂戴できれば幸いです。また、皆様には今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を心よりお願い申しあげ、発刊のご挨拶とさせていただきます。

研究主題

「わたし」が変わる「ものがたり」の学び

— 語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案 —

1 研究主題について

第4次産業革命、及び、それに伴う「Society 5.0」の到来が提唱されているように I o T (Internet of Things) や人工知能 (A I) に代表される科学技術の急速な発展は、近い将来、私たちの生活を大きく変えると予測されている。そういった知識や情報をめぐる社会の大きな転換期にあって、学ぶことの本来の意味や価値が問い直されている。「そもそも学びとは何か。」「何のために学ぶのか。」「なぜ学校という場所で学ぶのか。」といった本質的な問いに、学校教育がこたえなくてはならない時代を迎えているのである。

本来、学びとは、自分や自分をとりまく世界の見え方、感じ方を広げたり、深めたりするものであり、それによって自分自身が変わるものである¹。学んだことが自分とつながり、自分を変えていくものになったとき、はじめて私たちは学ぶことの意味や価値を実感する。

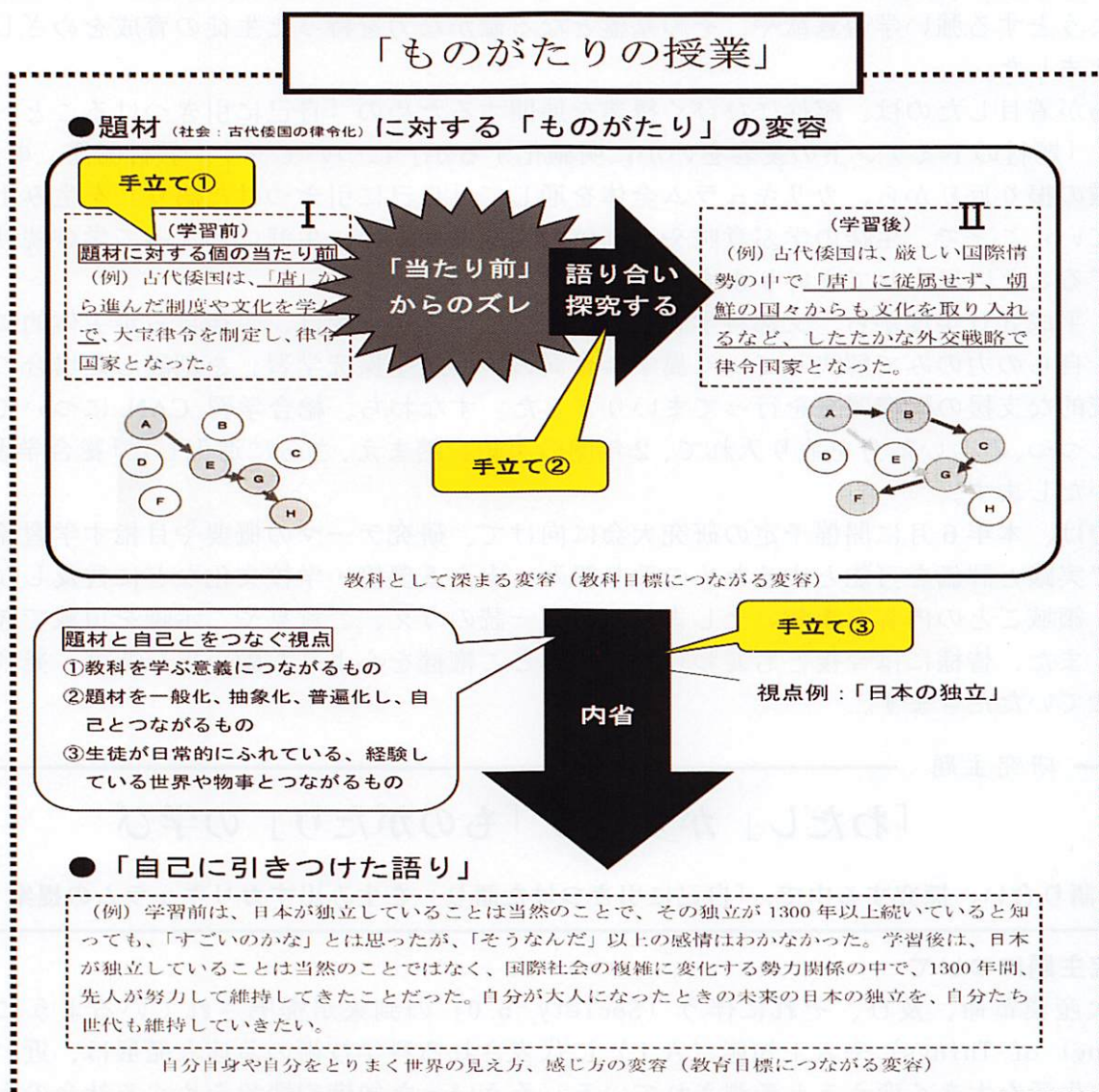
そこで今期は、学んだことと自己との関連を意識した「ものがたり」を「自己に引きつけた語り」として、以下のように定義した。そして、下記のような「自己に引きつけた語り」を、授業だけでなく本校のカリキュラム全体で生み出していくことで、生徒は自分を変えていく学びの経験を重ねていく。そのような経験を繰り返していく中で、生徒は学ぶことの意味や価値を実感し、生涯にわたって学び続ける学習者に育っていくと考えた。

「自己に引きつけた語り」

「語る」行為²の中でも、特に出来事（題材）と自己との関連を見つめ、時間軸の中でそれを筋立て、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。

2 今期の重点となる研究内容

今期は、「自己に引きつけた語り」を生み出す「ものがたりの授業」づくりとして、以下のような構造図を考え、図中の手立て①～手立て③の3つに重点を置いて実践研究を進めている。



¹ 林竹二（1990）は、「学んだことの証しは、ただ一つで、何かがかわることである」と述べる。

² 「語る」行為とは、素朴概念や既有知識、既習事項、自己の経験にもとづいて、時間軸の中で2つ以上の出来事の関連を筋立て、自分なりに意味づけ（結論づけ）たり価値づけたりする主体的な行為と定義した。

手立て① 生徒の「当たり前」の把握と、その変容の明確化

「当たり前」とは

生徒がこれまで経験したり、学んだりしたことで形成された、題材に対してもっている概念のこと³。

これまで本校では、「ものがたりの授業」づくりにおいて、個の文脈を把握することの重要性を提案してきた。今期は、学習前の生徒の個の文脈（「当たり前」）を把握した上で、それをどう変容させるのか（ゴールイメージ）を明確化することを重視した。「当たり前」は、生徒のもつ素朴概念や既有知識、自己の生活経験などをもとに構成され、「ものがたり」として表出される。その「ものがたり」として表出される生徒の「当たり前」が教科の学びを通して書き換わってこそ、意味や価値の実感を伴う「自己に引きつけた語り」につながると考えた。

手立て② 語り合い、探究する学びにつなげる学習過程

ア 課題（問い）を生徒のものにするための手立て

「当たり前」からのズレに出会う場面を設定する

イ 課題追究の方法を生徒のものにするための手立て

課題追究の方法を生徒が検討する場面を設定する

ウ 根拠にもとづいて語り合い、問い合えるための手立て

3つの要件を満たした語り合う問いを設定する

＜語り合う問いの3要件⁴>

- 語り合う目的が共有されていること
- 考えに差異がでること
- 共有された情報を根拠として理由づけできること



【語り合い、探究している場面】

手立て③ 「自己に引きつけた語り」を促す教師のかかわり

題材と自己とをつなぐ視点を設定する

題材に対する「ものがたり」の変容（構造図の上段）を「自己に引きつけて語る」ために、題材と自己とをつなぐ視点を設定する。視点の設定の際には、次の3点を大切にしている。

- ア 題材についての学びを通して教科を学ぶ意義につながるもの
- イ 題材を一般化、抽象化、普遍化し、自己とつながるもの
- ウ 生徒が日常的にふれている、経験している世界や物事とつながるもの

単元構成に題材と自己とを関連づける場面を組み込む

「自己に引きつけた語り」を生み出すためには、題材と自己とのつながりが単元における生徒の学びの文脈に位置づいていかなければならない。そのためには、題材と自己とを関連づける場面を単元構成に組み込む必要がある。そうすることで、単元を通して変容した題材に対する「ものがたり」が自己の変容とつながり、「自己に引きつけた語り」が促される。

³ 題材に対して「興味・関心をもてていない」とか「知らない」「考えたことがない」といった状況は、生徒の現状ではあるが、生徒の「当たり前」は形成されていないと考える。

⁴ 黒田（2017）は対話が活性化するための要件として「①対話をする目的が共有できている②対話に必要な情報を共有できている③考えのずれがある」をあげている。（香川大学教育学部附属高松小学校『研究紀要』2017、79頁）

《国語科》

言語による認識の力をつけ、豊かな言語文化を育む国語教室の創造
ー 自己理解を促し、言葉の価値を実感する国語科授業のあり方 ー



田村 恭子



木村 香織

本校国語科ではこれまで長年にわたって、「知覚化―意味化」につながる認識過程における、言語による認識のあり方やそのための教師のかかわりについて研究してきた。「知覚」した言葉を他の言葉や自己の経験などと結びつけて「意味化」することで、言葉そのものの意味を実感することができる。そして、言葉を自分のものとして獲得するためには、その言葉を自分はどうか捉えているか、自分にとってどんな意味があるのか、とメタ認知することが重要である。今期は、その自己理解の過程の中で、言葉の価値を実感し言葉を自分のものとして獲得していくための教師のかかわりについて追究する。



【考えを語り合う様子】

- (1) 深い学びに誘う学習サイクルを意識した単元構成の追究
生徒の既有知識や発達段階を考慮しつつ、＜教材内容＞を深めながら、＜教科内容＞と＜教育内容＞を豊かに関連づけ、統合していく単元構成について追究していく。
- (2) 学習者に＜コンフリクト＞（ズレ・葛藤・対立）を生じさせる学習課題・発問の検証
「わかっているつもり」になっている生徒の不十分さや、他者との考えのズレを明らかにできる学習課題や発問を研究する。コンフリクトを生じさせることで生徒の学習意欲を刺激すると考える。
- (3) 「ものがたり」につながる語り直しを生み出す手立ての研究
なぜ、生徒はある特定の他者の語りに影響を受け、自らの体験と結び付けて語り直すことができたのか。その視点で生徒の振り返り等を分析し、有効な手立てを検証していく。

《社会科》

これからの社会のあり方を自ら考える民主社会の形成者の育成をめざした社会科学習のあり方
ー 「探究的な学びの過程」を通して「今・ここ」を相対化し「社会的自己」を捉え直すー



大和田 俊



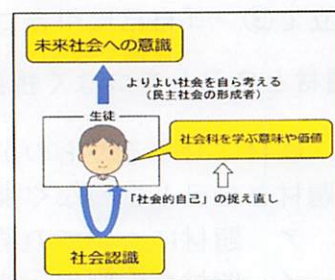
大西 正芳

民主社会の形成者の育成という社会科の目標に到達するためには、「今、私が生きている現代とは、どのような時代か」、「今、私が住んでいる地域には、どのような特徴があるか」、「今、私が生きている社会には、どのような制度が形作られているか」、つまり、「今・ここ」を捉えられないと、今後の民主社会を形成していくことはもとより、その方向性を構想することすら、子どもたちにとっては困難だろう。このような、『今・ここ』の社会に生きる私を「社会的自己」と定義する。その「社会的自己」を捉え直す手がかりが、社会科で学ぶ社会的事象である。つまり、さまざまな社会的事象の学びによって獲得される社会認識を鏡として「今・ここ」を相対化することで、それまで漠然としていた「社会的自己」の捉え直しにつながると考えた。

ただし「社会的自己」を捉え直すためには、異なる時代、異なる地域における特殊性に対する確かな社会認識を獲得する一方で、「今・ここ」を生きる自己につながる一般性が必要である。その異なる時代、異なる地域と「今・ここ」を生きる自己とをつなげるのが、人間社会の本質にかかわる普遍的なテーマである。そういった本質的なテーマや問いに対して、価値観や立場の異なる他者と協働して、こたえを模索し、つくりあげていく姿勢こそ、これからの民主社会の形成者に求められる資質・能力ではないだろうか。

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の3点を研究内容として、研究を進めている。

- (1) 生徒が主体的に社会認識を構築する「探究的な学びの過程」
- (2) 「今・ここ」の自己につながる普遍的なテーマを設定し「社会的自己」を捉え直す単元構成
- (3) 「社会的自己」の捉え直しを「ものがたり」で語り直す場の設定



【研究構想図】

《数学科》

数学的な見方・考え方が豊かな生徒の育成

ー 数学化を意識した授業から生まれる

「ものがたり」を通して ー



渡辺 宏司



山田 真也

これまでの研究実践から、他者と対話し学び合うことで新たな疑問や気づきが生まれることや、振り返りや語り直しを通して、授業前後で自分や自分を取りまく世界に対する見え方や感じ方に変容が見られることが分かった。しかし、生徒自身が自分の変容のよさに気づくには至っていないと思われる。現状は、機械的に問題を解いたり、他者の解法の違いやよさを理解しても自分の解き方を貫いたりする姿がしばしば見られる。



【課題解決に向けての対話場面】

そのような生徒は、数学的な見方・考え方が豊かになったことに気づいていない。数学から学ぶことの意味や価値を実感したり、感性を伴う学びができるようにしたりするためにも「ものがたりの授業」を実践し、生徒自身が問題発見・解決の過程を意識できるようにしたり、自分自身の数学的な見方・考え方が豊かになっていることを実感させたりする必要がある。

「一般的・普遍的に成り立ちそうな数学的な事柄を予想しようとする生徒」、「授業だけでなく、日常生活の中で生き生きと数学を活用しようとする生徒」などを数学的な見方・考え方が豊かな生徒の姿とし、そのような生徒の育成に向けて、次の3点を中心に研究を行っていく。

- (1) 生徒が目的意識をもって主体的に取り組むことができる単元構成や学習課題の工夫
- (2) 生徒が問題解決の過程を意識できるような活動の工夫
- (3) 数学的な見方・考え方の変容に気づくための振り返りの工夫

《理科》

自然事象から問いを見だし、自ら探究できる生徒の育成

ー 科学する共同体の中でつむがれる「ものがたり」を通して ー



渡辺 章宏



山下 慎平

生徒は、科学することを大切にする共同体（科学する共同体）の中で、自然事象から見いだした疑問や問いについて、科学的に対話し、試行錯誤を繰り返すことで、自然の摂理や真理を解明する過程を学ぶとともに、自分を取りまく世界について理解を深めていく。その中で生まれた学びを過去の自分の経験や考え、感じ方とつなげながら振り返り、自然を見直すことで、新たな視点で自然を捉え直すことのできる自分に気づく。そのような経験の積み重ねが、理科を学ぶことの「意味や価値の実感」につながり、学び続ける意欲を育む。



【実験から当たり前とのズレが生まれる】

理科において、学びの出発点は自然事象から問いを見いだすことであり、それは自ら探究する生徒を育成する上でも重要である。しかし、自然事象から生まれた疑問を探究可能な問いに変える力が、十分に育成されていないのが現状である。そこで、今期はこれまでの研究を引き継ぎつつ、疑問を科学的に解決可能な問いに変え、見通しをもって探究する力の育成と学びから生まれる自然観の変容を自己に引きつけて語るための手立てについて研究を行う。

- (1) 自己に引きつけた学びを生むための単元構成の工夫
- (2) 科学的に解決可能な問いを見いだすための教師のかかわり
- (3) 題材と自己の自然観の変容に気づく振り返りの工夫

《音楽科》

音や音楽の意味を見出し、音楽とのかかわりを深める学習のあり方

— 音楽観の捉え直しや変容からつむがれる「ものがたり」を通して —



堀田 真央

本校音楽科では、これまで、〔共通事項〕を支えとして、自分や作曲者の思いや意図を伝え合い、音楽のよさや美しさを語ることにについて成果を得てきた。今期は、これまでの研究を継承しつつ、生徒が自己の表現の工夫を考え試行錯誤を重ねたり、知覚した音楽の特徴をもとに作曲家や演奏者の意図について語り合ったりするなかで、音や音楽がもつ意味を見出すことができる学習をめざしている。



【教材曲を聴き直している様子】

音や音楽がもつ意味を見出すことができるよう学習過程を工夫するだけでなく、振り返りの中で、学習の中で生徒が見出した音や音楽の意味と、過去の自己の音楽観と比較させていきたい。それによって、音楽観の捉え直しや変容が生まれ、生涯にわたって音楽とのかかわりを深めていくことにつながると考え、本研究主題を設定した。以下の3点を研究の柱として研究を行っていく。

- (1) 音や音楽がもつ意味を見出すための視点の設定のあり方
- (2) 教材曲にかかわり続ける意欲を高めるための題材構成及び問いの工夫
- (3) 自己の音楽観の捉え直しや変容に気づくための振り返りの工夫

《美術科》

創造活動の喜びを見出す美術の学び

— 主体的に美術と関わり、自分にとっての意味や価値を見出す生徒の育成 —



渡邊 洋往

過去の研究から、本校美術科では表現、鑑賞両方の活動を「創造活動」とし、創造活動の喜びを見出すことができる生徒の育成のために、思いを語り、互いの表現のよさを認め合う活動を授業に取り入れてきた。また、自分らしい表現や味わい方ができるよう、学習過程の工夫や支援の方法を探ってきた。



【仲間の意見を受けてデザインを練り直す】

創造活動の喜びとは、人が本来持っている力、よりよく生きるために必要な要素であり、それは他者の喜びも認め、共有すること、他者の違った価値観も受け入れる力となり、これからの社会において必要な要素であると考え。しかし、「自分らしい表現や味わい方ができる」＝「どんな表現でも味わい方でもよい」という捉えに留まり、自ら主体的に喜びを見出そうとする姿が見られないという課題が挙げられた。そこで、主体的に美術と関わり、喜びを見出すために以下の3つの視点を持つことを考えた。

- ① 自分の見方、感じ方をもつ
- ② 他者との関わりの中で自分の考えを深める
- ③ 自分にとっての意味・価値を見出す

そして、それらの視点を表出させるために、以下の3点を柱として研究を行っていく。

- (1) 「非言語的・感覚的経験」に基づく鑑賞と表現の一体化を意識した単元構成
- (2) 題材との出会いから生まれる素朴な見方・考え方から見出す問いの工夫
- (3) 作品の見方や感じ方の変化を「ものがたり」で語り直す場の工夫

《保健体育科》

運動・スポーツの面白さに浸り、

豊かなスポーツライフの実現へつなぐ保健体育学習

ー 運動・スポーツの本質を問いつける共同体づくりを通して ー



石川 敦子



徳永 貴仁

保健体育学習を包括する問いを「運動・スポーツの本当の面白さとは何か?」とし、特に運動の苦手な生徒に着目した単元構成を含めた学習課題や教材の工夫を通して、教師主導の授業ではなく生徒とともに創る授業をめざし研究を進めてきた。

今期は、前期の反省から、自らの課題やチームの課題を分析したり解決に向けての筋道が分かったり、他者とかかわることによってわかるようになっていく面白さを味わえる授業を、生徒とともに創りたいと考えている。教師が、学ぶべき教科内容を教えるために意図的につくった「学習集団」ではなく、「する・みる・支える・知る(調べる)」等の運動・スポーツや健康との多様なかかわりや他

者とかかわりながら課題を解決していく過程でつくられる「共同体」を通して、豊かなスポーツライフの実現ができる生徒の育成をめざした保健体育学習のあり方について、以下の視点で研究を行っていく。



【ブラインドサッカーを通して

かかわり合う様子】

- (1) 運動・スポーツの面白さに浸る単元構成と問いの工夫
- (2) 多様なかかわりの中で学びの意味や価値を実感していく共同体づくり
- (3) 豊かなスポーツライフへとつながる「ものがたり」が生まれるための教師のかかわり

《技術・家庭科》

「生活に始まり、生活に戻る」実践力を育む技術・家庭科教育

ー 生活を語り合い、実践することで生まれる「ものがたり」を通して ー



池下 香



渡邊 広規

技術・家庭科では「振り返りー意味化ー生活化」の授業に取り組んできた。前回大会では、「ものがたり」を踏まえた「毎時間の振り返りと個の文脈の変容の丁寧な見取り」「自分を主人公にした題材終末のレポートの視点」が、生活実践力を育むために有効であることが分かった。今期はこれらをさらに深化させ、毎日の生活で当たり前に行っていること(事前の文脈)から題材構成を行い、自分の生活の当たり前にズレを生じさせる。そして、語りだけでなく、学びを生かして自分の生活にアクションを起こすこと(生活実践力)に変容しているかを追究する。

また、題材終末のレポートの視点として、自分の生活を社会や環境との関係にまで広げられているかについて見取りたい。今期の研究では、以下の3つの視点で研究を行い、ひとりの自立した生活者になるための実践力を育み、生徒の自己形成へとつなげていきたいと考える。



【お気に入りの衣服の表示を探究する様子】

- (1) 多様な個の文脈から生活の当たり前を捉え、生活実践力へとつながる題材構成と問い
- (2) 生活者として、語り合い、探究するための場の工夫と教師のかかわり方
- (3) 生活を見つめ直し、実践することで、自己に引きつけた新たな語りを生むための工夫

《英語科》

コミュニケーションへの意欲を高める英語授業の創造 — 主体的な言語活動から生まれる

「ものがたり」を通して —



明田 典浩



伊賀 梨恵



眞鍋 容子

これまで英語科では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点をおいて研究を行ってきた。また、ことばの奥深さや多様性を実感させ、言語や文化に対する理解を深めさせたり、生徒が主体となって自分の考えなどを積極的に伝え合う言語活動を単元に組み込んだりすることで、コミュニケーションへの意欲につなげる実践を行ってきた。

今期は、生徒の主体的な学びを引き出すために、生徒が学習前にもっている考えを踏まえてコミュニケーションの場面設定を行い、言語活動を行う。その際、コミュニケーションの必然性をもたせられるように工夫する。その言語活動を通じての学びを、既有知識や経験と結びつけ、状況や相手に合わせて適切な英語表現を使用しなければならないといった、英語に対する新たな見方・考え方を獲得することを通じて、英語を学ぶ意味や価値を実感させたい。また、コミュニケーションの場面で欠かすことのできない即興でやり取りできる力も身につけさせたいと考えている。

そのために、以下の内容を柱に研究をすすめる。

- (1) 言語活動の効果的な場面設定の工夫
- (2) 即興で話す力を育む教師の支援の在り方
- (3) 英語でのコミュニケーションに対する新たな「ものがたり」が生まれる語り直しの工夫



【英文パズルをする様子】

《学校保健》

人間性豊かで心身ともにたくましい子供の育成をめざして

— ナラティブ・アプローチの手法を取り入れた教育相談の在り方と 他者と関わる力を育む養護教諭の関わり —



日本 亜矢

前回大会での課題の1つに思春期を迎え、大人との話すことを拒否する生徒や、自分の持ちや言いたいことを言葉として伝えられない生徒への対応が課題となった。そして、自分の気持ちや、言いたいことを伝えられる生徒と伝えられない生徒の差の大きさを感じ、更なる、心の健康の予防的な取り組みの必要性を感じた。また、文部科学省（2017）「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～」の中で、健康な生活を送るために、児童生徒に必要な力の一つとして「他者と関わる力」をあげている。

今期は、ナラティブ・アプローチの手法を取り入れた教育相談の在り方と他者と関わる力を育む養護教諭の関わりについて追及する。そのために、以下の内容を柱に研究をすすめる。

- (1) ナラティブ・アプローチの手法を取り入れた教育相談の在り方
- (2) SC、SSW、小学校と連携した教育相談体制の在り方
- (3) 「他者と関わる力」を育む養護教諭の関わりの工夫



【ソーシャルスキルトレーニングの様子】

総合学習シャトル

総合学習シャトル（以下シャトル）のねらいは、教科学習における活用と総合学習CAN（以下CAN）における探究とをつなぐことにある。そのため、CANでの探究との関連性を考えCAN 2019 では、一般講座をCANが始まる1月と2月に、特設講座をCANの探究が本格的に始まる7月に実施した。生徒は自分たちの探究を踏まえて一般講座では3講座から1つ（図1）、特設講座では16講座から2つ（図2）を選択し、必要なスキルを身につけた。

講座名	講座内容	
実験分野 「変数の扉」	変数への着目の仕方や変数制御の方法を習得し、自分たちで実験を計画していく。「落下する紙コプターの滞空時間は何に関係しているのか」を課題とし、その課題を解決する中で、変数を見いだしたり、データを批判的に見たり、データを複数回とることの重要性について考える。	
調査分野 「徹底調査！ 附坂中生の実態とは？」	「附坂中生の実態をどうやって調査するのか」を課題とし、アンケート項目を考え、その調査データをもとに附坂中生の実態を結論づけた。何のために調査するのかという目的、調査するデータの数量だけでなく、その質にも着目する大切さと調査したデータの質を批判的に検証する活動も行う。	
創造分野 「われら企画・開発部！」	考えたコンセプトから試作品をつくり、その企画や試作品についてのプレゼンを行う。「香川県に訪れた外国人旅行者に対して、どのようなガチャガチャが好まれるだろうか」を課題とし、1つのものをつくるために、どのようなことを考える必要があるのかという着眼力や発想力を鍛える。	

【図1 CAN2019 で実施した一般講座の内容】

基礎的な力	講座名	講座内容
I 課題設定力	① 発想法	ブレインストーミング、KJ法など、発想方法スキルの習得
	② インタビュー、取材	インタビューを行うまでの手順と、必要なスキルの習得
	③ アンケート	研究に必要なデータを収集するために、実際にアンケート調査（質問紙作成など）を実施
	④ 思考ツール	ただ考えるのではなく思考ツールを実際に使いながら、考える「方法」を身につける
II 課題追究力	⑤ 資料収集	観察、フィールドワークなど未知の中から自分で情報を集め、資料を作成
	⑥ 情報の分析	実験や調査から得られたデータの間、関係があるのかないのか、相関関係を探る技能の習得
	⑦ データの見方・とらえ方	データの信頼性や妥当性についての概念の習得
	⑧ 情報の伝え方	「ミニ新聞」を作成することで、伝えたい情報を正確かつ端的に伝える技能の習得
III 表現力	⑨ 文章表現法	要約や項立て、文章の構成など、集めた情報を整理して、分かりやすく表現する技術の習得
	⑩ プレゼンテーション1	プレゼンテーションを行うのに必要な表現スキルの習得
	⑪ プレゼンテーション2	プレゼンテーションソフトの効果的な使い方や技能の習得
	⑫ 視覚化	情報を分かりやすく伝えるために、絵やグラフなどで視覚化する技術の習得
IV 自己評価力	⑬ グラフの見せ方	目的に応じてグラフを効果的に表すスキルの習得
	⑭ リフレクティング	グループワークトレーニングを通して振り返りのあり方を追究
V チームマネジメント力	⑮ コミュニケーション	クラスター内で探究が円滑に行われるコミュニケーションスキルの習得
	⑯ リーダー養成研修講座	リーダーとしての資質、チームビルディング、チームマネジメントについて学ぶ

【図2 CAN2019 で実施した特設講座の内容】

総合学習CAN

1 平成31年1月～令和元年11月（CAN2019）の活動時期と概要

今年度のCANでは、生徒のさらなる探究活動の充実に向け、「幅広い探究課題の設定を促す工夫」、「生徒の探究活動を深めるための工夫」の2点を重点項目とし、新たな取り組みや計画の変更を行った。活動時期と概要は下のとおりである。外部との連携をさらに強化し、生徒の探究がより深いものとなるよう、3人クラスターの編成時期を早くし、これまで2回だったCANの日を3回に増やすなど、活動内容についても一部変更を行った。

【CAN2019 活動時期と概要】

総合学習シャトル・CAN													
時期	冬休み・1月・2月		3月・4月		5月・6月		7月・8月・9月		10月・11月				
人数	1人CAN		2人CAN		CANの 日Ⅰ		CANの 日Ⅱ	シャトル特設	3～4人CAN		CANの 日Ⅲ	プレ発表会	文化祭
概要	個人で探究テーマを設定する。		2人で意見を出し合い探究テーマを深化させる。		探究の方向性・方法等について専門家からアドバイスをもらったり、予備調査を行ったりする。		調べた方法で調査や実験など探究活動に取り組む。CANの日を活用し、外部の専門家を訪問して意見をもらう。7月にはシャトル特設で探究スキルを学ぶ。		探究成果をまとめ、プレ発表会や文化祭等で発表する。探究の成果を最終論集にまとめる。				

(1) 幅広い探究課題の設定を促す工夫

生徒が自ら問いを立て、探究することがCANの大きな特徴の1つであるが、生徒の興味関心の幅はそれほど広くなく、毎年よく似たテーマを安易に設定し、探究が行き詰まる生徒の姿が見られる。そこで、本当に自分がしたい探究課題を幅広い視点で身の回りから探し、設定するために、分類表と3つの視点（視点1：身近な疑問から 視点2：身近な問題から 視点3：特技や好きなことから）を含むワークシートを作成した。

(2) 生徒の探究活動を深めるための工夫

より深い探究を行うためには、仮説の設定が重要である。しかし、これまでの探究深化シートでは、どのように仮説を立てたらよいのか、またその仮説をもとにどうやって探究を進めていけばよいのか、生徒にとって分かりにくいという課題があった。そこで、図1のような探究深化シートを作成した。このシートを使うことで、自分の探究のゴールや問い、仮説を明確にすることができ、見通しをもった探究が行えると考えた。

2 CAN2019の成果と課題

図2は、課題を設定する力がついたと思うかを調べた結果をまとめたものである。どの学年も肯定的な意見が8割を超えており、1年生に比べて、2、3年生では9割以上の生徒が、力がついたと考えていることが分かる。また、アンケートに書かれた生徒の記述からは、CANだけでなく授業や日常のなかで課題を見つかったり仮説を設定したりするようになった生徒の様子がうかがえた。

図3は、課題追究する力がついたと思うかを生徒に自己評価してもらった結果をまとめたものである。どの学年も肯定的な意見が8割を超えており、学年が上がるにつれて力がついたことを実感している生徒の割合が増えている。また、アンケートに書かれた生徒の記述からは、先輩に頼っていた1年生から、3年生として探究をリードし、結果からさらに疑問を見つけ、それをどのような方法で明らかにすればよいのかを考えるように成長していく生徒の様子がうかがえた。しかし、生徒の中には、課題をどのように追究していけばよいのか、見通しをもつことのできない生徒も見られる。そのような生徒に対する教師側の支援や何らかの手立てが必要であると考えます。また、探究した結果をどのようにま

探究深化シート コード() 名前()

1 探究の「ゴール」：何がどうなればよいのかを具体的に
ファーストサープが思った場所に70%以上の確率で打てるようになること。

問いづくりのルール（2つ）
①-1：どうして○○なのだろうか、なぜ○○でないといけないのかという形で書くこと。
①-2：数値や言葉（先験）がすでに明確な答えを持っているものは不可。

2 明らかにしたいこと「問い」：上の2つのルールを満たしていること
どうしてファーストサープが思った場所に打てないのか。

3 問いに対する自分が予想する答え「仮説」：○○だから××なのではないか
フォームやトスのあげ方、手首の使い方が悪いから、ファーストサープが思ったところ打てないのではないかと。

その仮説を立証するためにどのような「データや試作品」が必要か

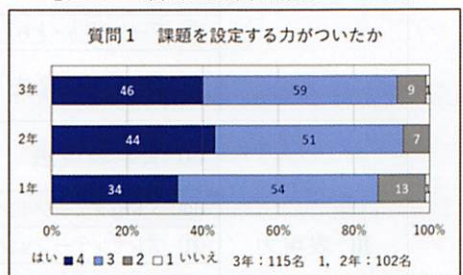
データ①	データ②	データ③
上手い人と自分のフォームの相違点	トスのあげ方とサープの成功率の関係	手首の使い方とサープの成功率の関係

データを調べる「方法」(推測対象に、例を使って、どんなことをするのかを具体的に)

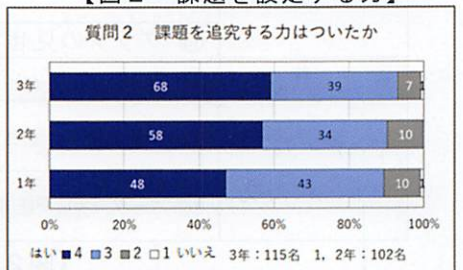
①(実験・観察・調査)	②(実験・調査・観察)	③(実験・調査・観察)
・上手い人と自分のフォームをそれぞれビデオで撮影し、その違いを比較する。 ・ゼニスの雑誌やインターネットで上手い人のフォームを調べて、自分のフォームと比較する。	・上手い人のトスのあげ方を参考に、トスのあげ方を変えて、変える前と変える後でサープの成功率を比較する。	・上手い人の手首の使い方を参考に、手首の使い方を変えて、変える前と変える後でサープの成功率を比較する。

先行研究や参考文献：過去の探究や書籍、雑誌など
ゼニスの専門雑誌（ソフトテニスマガジン5月号）、通巻のCANの探究（28号）
この研究における専門家：できれば住所や電話番号などの連絡先も調べてみよう
ゼニスで活躍しているプロの選手やコーチ（連絡先：××××××××）

【図1】新たな探究深化シート



【図2】課題を設定する力



【図3】課題追究する力

とめ、分析し、考察すればよいのか、それらをどのように発表すれば相手に伝わるのかといったこともまだまだ改善していく必要がある。さらに、生徒のアンケートからはCANの学習と教科の学習のつながりがあり意識されていないということも明らかになった。今後は生徒の探究を深めると同時に、そのような点についても検討していきたいと考えている。

3 令和2年度のCAN2020に向けて

生徒の探究活動をより深いものにするための、次期CANの重点事項は、以下の通りである。

- ① 発表や表現、問う力を向上させるための取り組み
- ② クラスター間の格差の解消に向けた取り組み
- ③ 教科の学習とのつながりを意識した取り組み

これらの重点項目を中心に改善を行い、学校の研究文化を象徴する「最高の学びの場」としてさらに進化させていきたい。

3年生のCAN物語より(一部抜粋)

3年間のCANを振り返って、私にとってCANとは「好きを深めるもの」だと思った。私は1、2、3年とキャラクターについて探究してきた。それはキャラクターが好きだったから。でも入ってみれば、気づいてなかったことに気づけたり、新しい疑問が生まれたりキャラクターだけで3年間探究できた。3年だけでは足りない。そう思った。浅い沼がどんどん深くなる。この世界に、浅い沼はないのかもしれない。いろいろなクラスターを見て、そう思った。1つのことについて、たくさん探究して、それでも足りない。どこもそうでした。最初は興味でやってみても、また次、また次ハマっていく。それは、自分の考えを深めていっているのだと思いました。「好き」からここまでくるとは私も思っていなかった。賞に選ばれたりしなくても、自分の納得できるような結果を出して、その結果から気づきと疑問、そして自分の考えが得られたら、それはもうすでに最高の賞なのだと今はそう思う。

最後に、これからCANで探究する後輩たちに伝えたいことは、最初は何の価値がなくても、自分にとって価値のあるものなら、それは磨きあげれば輝く宝石になるということである。(中略)最初は「価値がないもの」でも、それが自分にとって好きなこと(価値があるもの)ならば、無我夢中で楽しみ、学べば(磨き上げれば)それは周りからも賞賛されるものになると思います。



語り合いの時間

生徒たちが、共に語り合い、探究する集団に育っていくための土台づくりとして、新たに「語り合いの時間」という授業を設定した。「語り合いの時間」とは、「子どもの哲学」における哲学対話の手法を参考にしており、答えのない問い(「勉強するのは何のためか」、「良いことと悪いことの境界線はどこか」、「ウソをつくことは悪いことか」など)に対し、参加者全員で問い、考え、語り、聴き合うことを通して、自らの考えを深めていく授業である。語り合った後には、生徒が自分自身の取り組みや問いに対する考え方の変容を振り返る時間を設定し、道徳の時間 50 分の中で行えるようにしている。また、語り合う習慣をつけるために、帰りの短学活の時間においても、週に1回5分程度の「語り合いの時間」を設定した。学級によって語り合うテーマは様々であるが、どの学級でも自分の経験をもとに素直に語る生徒の姿が見られた。今後は、各教科の授業においても語り合い探究することができる生徒の育成をめざし、生徒の問う力の育成にも力を入れて取り組んでいきたい。

語り合いの時間のルール

1. 相手が話している間は聴く
2. 発言権をもったまま黙った人がいたら待つ
3. 意見がまとまらなかつたり、途中で変わったりしてもよい
4. 発言せず、聴いて考えているだけでもよい
5. 参加している人が傷つくようなことは言わない



【「語り合いの時間」のルール】



【「語り合いの時間」や帰りの短学活で語り合っている様子】

研究文化の醸成

1 大学出前授業

香川大学の各学部の先生を講師としてお招きし、生涯学習、キャリア教育の一環として12月に実施した。本物の研究者から、総合学習CANへのヒントをいただく機会となることも期待している。

学部	講師	内容
教育学部	小森 博文	体の中ではたらく分子
法学部	鹿子嶋 仁	法(ルール)の読み方
経済学部	原 直行	観光と地域活性化
医学部	横平 政直	がん研究はなぜがんを壊滅できないのか？
農学部	秋光 和也	希少糖：かがわ発イノベーションの今
創造工学部	鶴町 徳昭	いつでも手元に虹を ～光と物質の相互作用～

2 親子セミナー

前期は毛利公一さん(社会福祉法人ラーフ)より「地域によく生きる」という演題で、後期は竹下和男先生(子どもが作る“弁当の日”提唱者)より「あなたの子どもの台所に立たせよう」という演題で、これからの生き方や考え方について多くのご示唆をいただいた。



毛利公一先生



竹下和男先生

教育研究発表会のご案内(第1次案内)



副校長 石川 恭広

この度、下記の日程で、令和2年度教育研究発表会を開催する運びとなりました。つきましては、是非ご参会いただき、ご指導・ご助言を賜りたくご案内申し上げます。

- 1 テーマ 「わたし」が変わる「ものがたり」の学び
—語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案—
- 2 日 時 令和2年6月12日(金) 8:50～16:45
- 3 内 容
 - 全体提案
 - 公開授業(教科、総合学習CAN)
 - 教科、学校保健提案・授業討議
 - 講演 上智大学総合人間科学部教育学科 教授 奈須 正裕 先生

編 集 委 員

大和田 俊 山 田 真 也
 鷲 辺 章 宏 渡 辺 宏 司
 渡 邊 洋 往 堀 田 真 央
 眞 鍋 容 子 木 村 香 織
 大 西 正 芳

令和2年2月14日

編集 香川大学教育学部附属坂出中学校
 〒762-0037 坂出市青葉町1番7号
 TEL/0877-46-2695 FAX/0877-46-4428
 E-mail sakachu@ed.kagawa-u.ac.jp